

音法則の普遍性 —ゲルマン語の個別方言を対象に—

河崎 靖

京都大学

E-mail: GGB00753@niftyserve.or.jp

「方言は言ってみれば虹の色。標準語という統一体の中で豊かな色合いを放つもの。」

[...] naast het fraaie beeld van 'de regenboogkleuren' voor de dialecten, de metafoor van 'het witte zonlicht' ter aanduiding van de Nederlandse eenheidstaal. Het witte zonlicht en de regenboog tesamen vullen het zwerk van de Nederlandse taal in al zijn kleurenrijkdom, in zijn 'eenheid in verscheidenheid' [...]. (Hagen 1991:9)

1. はじめに

1.1 従来の音研究

いかなる言語現象についても、常に新しい解釈の生じる可能性があろう。これまでの伝統的な捉え方に不備はないにしても、全く別の角度から検討し直される余地のあるものもある。例えば、長い研究の歴史のある音変化についても、従来とは違った新しい視点からのアプローチが提起され得よう。理論としての妥当性に関しては、当然のことながらさまざまな議論のあるところではあるが、新しい観点を提供するという意味では非常に興味深いと言える。

従来、幅広く扱われてきた音現象も、大局的に見れば、次のような音法則として一般化できよう¹。簡条的にまとめてみれば、

- 1) 挿入、削除 (insertion or deletion of segments)
- 2) 並び換え (reordering of segments)
- 3) 異化 (dissimilation)
- 4) 同化 (assimilation)

これまで、さまざまな言語、方言に関して、いろいろな扱いを受けてきた、上のような音現象の中でも、最も起こりやすいと考えられるのが 4) の同化である²。一例を引けば、一見、複雑そうに見えるオランダ語の指小辞(diminutiv)の付加も、次の例に示されるように、同化の現象として説明がつく。「何か小さなもの」の意の指小辞は、基本形は -je でありながら (huis「家」- huis-je「小さな家」)、語幹末の子音に応じてその語形を変化させる (schoen「靴」- schoen-tje「小さな靴」, boom「木」- boom-pje「小さな木」)³。

本稿は、特に「同化」の現象に注目し、次の 1-2 章で提示する枠組みを用いて、通常、個別言語(方言)的とみなされてきたいくつかの音現象をできるだけ一般的な法則性でもって捉えることを目標とする。

¹ Jeffers/Lehiste (1982:3)

² Arlotto (1972:81)

³ Shetter (1988⁴)

1.2 子音の同化現象

本来、音変化という現象は、言語(方言)の差異を問わぬ普遍的な性質をもつはずのものであるという立場に立てば、個々のさまざまな音現象をかなり一般的な形で定式化することができると考えられよう。本稿では、子音を主たる対象とし、子音間でどのような同化の現象が起こりうるかを考察する。

さて、子音に関して、その子音度、子音らしさ、いわば子音の相対的強さ関係(consonantal strength)は、下記の図表において、左から右へと順にその度合いが増していくと考えられる⁴。

半母音	流音	鼻音	有声摩擦音	有声破裂音	無声摩擦音	無声破裂音
glides	liquids	nasals	voiced fricatives	voiced stops	voiceless fricatives	voiceless stops
1	2	3	4	5	6	7

こうした関係はおよそ一般的に受け入れられているところである。本稿において、この図表は、隣接する音節間で子音同士がどのような影響関係にあるかを考察する尺度として有用である。すなわち、ある音節 $-V_1C_1$ とそれに続く C_2V_2- という連続において、語末音 $-C_1$ と語頭音 C_2 の関係を同化現象という観点から捉えてみるという本稿の目的に向けて、その基準となりうると考えられる。上の尺度で、 C_1 と C_2 の関係が

$C_1 \leq C_2$ の場合：

C_2 が C_1 に何らかの音的影響を与える

$C_1 > C_2$ の場合：

C_1 が C_2 に何らかの音的影響を与える

という傾向が多く言語現象にかなり一般的に認められるとすると⁵、これまでは個別的な現象として個々の言語(方言)の文法内で扱われてきた、いくつかの音に関する現象が極めて一般的な図式で捉え直せる可能性が見出せよう。本稿では、次の2-1章、2-2章、2-3章で各々、歴史文法で伝統的によく知られた三つの音現象を、今、述べたような一般的な枠組みで取り扱ってみたい。

2. さまざまな音現象

2.1 音接触効果(Primärberührungseffekt)

印欧語の文法で、次の文例に見られるような $st (< t + t$ 、すなわち、助動詞 $m\acute{o}tan$ の語幹 $m\acute{o}t-$ に接続法過去の接尾辞 $-i$ が付いた場合に起こる音の連続)に関して、通常、音接触効果(Primärberührungseffekt)という考え方をを用いて説明されるのが一般的である⁶。

⁴ Vennemann/Murray (1983:519)を参照のこと。

⁵ Vennemann/Murray (1983:520)では、Syllable Contact Lawと名付けられている。

⁶ 同じく、次の語形(古高ドイツ語 $wis-ta$ 、古サクソン語 $wis-sa$ <ともに動詞 $witan$ 「知る」の過去形>)を説明するのにも、通常、音接触効果(Primärberührungseffekt)が用いられる。

Uuas im uulleo mikil, that he sia so helaglico haldan mosti.

'Sein(Joseph) Wille war groß, daß er sie(Maria) so heilig halten könnte'

「マリアを聖なるものと見ようとするヨゼフの意志は固かった」

(古サクソン語 "Heliand" M写本 332-3 行)

これは、歯茎音を語頭にもつ音節の前で閉鎖音に起こる音変化で、本来、印欧語の現象である。図式的には次のようにまとめることができる。

$g, gh, k + t, th, d > kt$

$b, bh, p + t, th, d > pt$

$d, dh, t + t, th, d > ss/st$

ラテン語にも、次のような語形にその痕跡が残っている。

rectus (<*reg-tus) < regere 「支配する」

scriptus (<*scrib-tus) < scribere 「書く」

cessus (<*ced-tus) < cedere 「入る」

ゲルマン語では、上記のプロセスにさらにいわゆる音韻推移の過程が加わる。

$g, gh, k + t, th, d > kt > ht$

$b, bh, p + t, th, d > pt > ft$

$d, dh, t + t, th, d > ss/st > ss/st$

その結果、親縁関係にある語彙間に閉鎖音、摩擦音の交替が生じ、例えば現代ドイツ語の例で言えば次のようなものである。

recken「伸ばす」: rechts「右に」, geben「与える」: Gift「毒」, laden「積む」: Last「積荷」

さて、ここで概観した、伝統的な音法則の中には、一定の方向性が見て取れるように思われる。つまり、より一般性の高い音変化の枠組みで捉え直す可能性である。すなわち、先の1-2章で想定した音変化のプロセスは、この音接触効果(Primärberührungseffekt)の現象を把握する上で大部分の場合、有効である。具体的にその適用の過程を追ってみれば、この場合、 C_1 に当たる子音が、有声音(b,d,g)であれ、有声帯気音であれ(bh,dh,gh)、(もちろん、無声音(p,t,k)の場合も、)後続する C_2 という歯茎音からの影響を受けて、結果的にkt,pt,ssという音結合が生じる。逆に、 C_1 = 無声音(p,t,k)、 C_2 = 有声音(d)の場合、より影響力の強い C_1 が C_2 に自らのもつ特性<無声性>を付与したものと想定できよう。確かに、有声音同士の音の連続から無声音の音結合が生じるという点では音接触効果(Primärberührungseffekt)の現象を全面的に説明しきれるとは言えないが、1-2章の枠組みは、この音変化の基本的なプロセスを捉えて

この時、ssは、その前段階として*ttがたてられ、そこからさらなる変化を経たものと考えられる。また、stという音結合は、他の二系列(kt,pt)からの類推により生じたものとみなされよう

いると言える。このように、従来、印欧語内の現象と扱われがちであった音接触効果 (Primärberührungseffekt) も比較的、言語一般の特性に通じるものであるとみなせよう。

2.2 語末音硬化 (Auslautverhärtung)

一般に、語末音硬化 (Auslautverhärtung) という音現象は、これまで割とゲルマン語について多く言われてきたものである。すでに9世紀の“Heliand”(古サクソン語)、10世紀の“Wachtendoncksche Psalmen”(古低フランク語)では、語末音硬化 (Auslautverhärtung) は定着しているとみなされるが、本稿では、この問題を、とりわけ該当子音に後続する音との関わりにおいて考察してみたい。

“Wachtendoncksche Psalmen” は、別名 “Karolinger Psalmen” とも呼ばれ、10世紀にオランダ・リムブルク (Limburg) 方言で書かれたであろうと推定される、ラテン語 (Vulgata) からの行間訳である。現存する写本は、旧約聖書・詩篇 (Psalmen) のうちの 1-2, 18, 54-72 の 22 詩篇で、詩篇の他の箇所は部分的に訳が施された註釈が残っているにすぎない。この “Wachtendoncksche Psalmen” に在証される次の二組の文例において、

et stultus non intelliget.

dumba

「愚かな者は (主の思いを) 悟ることができない」
(古低フランク語 “Wachtendoncksche Psalmen” 91-7 節)

a facie insipientiae meae.

dumpheide

「私の愚かさによって」
(古低フランク語 “Wachtendoncksche Psalmen” 37-6 節)

もう一組の文例として

testimonium Domini fedele.

urkuntscap godes getruuui.

「主の証は確かである」
(古低フランク語 “Wachtendoncksche Psalmen” 18-8 節)

quoniam insurrexerunt in me testes iniqui.

urkunden

「なぜなら偽りの証をする者が私に逆らって起こるので」
(古低フランク語 “Wachtendoncksche Psalmen” 26-12 節)

この文例の dumba 「愚かな」: dump-heide 「愚かさ」, urkunden 「証人」: urkunt-scap 「証」という対を見比べてみて、それぞれの後者の複合語の中に見られる無声音化 ($b > p$, $d > t$) は、語末音硬化 (Auslautverhärtung) ともみなせるが、また同時に、その子音に後続する無声摩擦音による影響とも考えられる。この文献では、こうした音環境で、単一語の場合よりもむしろ一貫して無声音化が起こる傾向がある。この傾向は、1-2章の枠組みで捉え直すとすると、C:(有声

閉鎖音) $\leq C_2$ (無声摩擦音)という条件のもと、 C_2 が C_1 に影響(この場合、無声音化)を与えているというふうに考えられる。

同様の傾向は、古サクソン語 “Heliand” にも見て取れる。次の例のように、arbed ‘Mühsal’ を含む複合語(全4例)のうち、

arbit-sam (C写本 1356行)
 arbid-lon (C写本 3426行)
 arabid-uuerco (C写本 3437行)
 arbid-lico (C写本 3462行)

後続する音が無声音である第一例においてのみ、語末音の無声音化($d > r$)が生じている。これは、s音(C_2)が先行子音($C_1 = d$)に影響を及ぼしているケースであると言える。同じく “Heliand” では、同様の傾向が、写本間の相異を通してさらに裏付けられる。すなわち、当時の音の状態を比較的、忠実に表記しているC写本と、表記上の画一化が進んだM写本とで、有声・無声の対立が起こっている箇所がしばしば見られる。

< C写本 >

Than uuas im Iohannes fan is iuguthedi
 auuahsan an enero uuostinniu. (“Heliand” 859-60行)

< M写本 >

Than uuas im Iohannes fon is iugudhedi
 auuahsan an enero uuostunni. (“Heliand” 859-60行)

‘Nun war Johannes aus seiner Jugend herangewachsen in einer Wüste’

「さてヨハネは若い時から荒野で育った」

ここで、C写本: iugut-hedi「青年期」、M写本: iugud-hedi「青年期」の対比から、h音(C_2)が先行する子音($C_1 = d$)に影響を及ぼし無声音化($d > r$)していることがわかる。このように、とりわけ複合語の中での語末音硬化(Auslautverhärtung)を分析することにより、音節を超えた子音間での同化の現象について考察することができた。

2.3 動詞 hebbian 内の同化現象

古サクソン語 ‘Heliand’ のS写本は、その発見が今世紀も1970年代、‘Heliand’ 第五の写本として ‘Heliand’ 研究にいくつかの新しい視野を切り拓いたが、本稿のテーマ、子音の同化現象に関しても興味深い事例を提供する。

< S写本 >

thah he heddi creht godes, (“Heliand” 382行)
 ‘obwohl er die Kraft Gottes hätte’
 「彼は神の力をもっているにもかかわらず」

siu hedde ire drohtine uuel (“Heliand” 505-6 行)
 githionad t(.) thonke.
 ‘sie hatte ihrem Herrn zu Dank gedient’
 「彼女は感謝の気持ちを込めて主に仕えた」

That geld hedde tha gilestid (“Heliand” 528-9 行)
 thiū idis an themu alahe.
 ‘die Frau hatte nun das Opfer im Tempel vollbracht’
 「その女性は神殿でいけにえを捧げた」

hedden im hebencuning (“Heliand” 533-4 行)
 simlunti gisiðe.
 ‘sie(Joseph und Maria) hatten immer in ihrer Hausgenossenschaft den Himmelskönig’
 「ヨゼフとマリアの家族にはいつも天の王がいた」

huonde [...] im hedde forlien. (“Heliand” 573 行)
 ‘denn er(Herr) hatte ihm (die Gabe) verliehen’
 「なぜなら主は彼に才能を授けていたので」

この5文例の中に見られる、hed-d(e)の語形は、動詞 hebbian「もつ」の過去形で、語幹に過去接尾辞 -d(e)が付いた形である。しかしながら、一方、他の写本ではいずれの箇所もすべて、子音(b,d)の同化現象が起こる前の hab-d(e)という語形を示している。これら二つの語形について、1-2章の枠組みに則して言えば、 C_1 (b音)と C_2 (d音)が子音度において対等の関係にあり、 $C_1 \leq C_2$ のケースに相当し、よって C_2 が C_1 に同化現象を引き起こしたと捉えられよう。現代オランダ語の hadden(過去複数形)、現代ドイツ語の hatte(過去単数形)へとつながる、動詞 hebbian の語史の中の、同化現象という一段階をここに見ることができる。

3. 終わりに

以上に見てきたように、長い研究の歴史のある音の問題についてさえ、新しい視点で、いくつもの現象を一つの視野のもとに収めることは可能であろう。こうしたアプローチの問題は、実際の研究レベルにおいては方法論に問題に立ち帰る。例えば、印欧語学のように、200年以上にわたり発展、改良されてきた方法論がある。その研究史の中には、いわゆる方言学的手法で収集されたデータを重視するものから、比較的、理論的なアプローチまでいくつかも異なった立場があった。もちろん今日なお、一般にヨーロッパ式と言われる方法やアメリカ的と評されるアプローチなどさまざまである。伝統的な研究分野に取り組む場合、方法論をかなり客観的に判断し見極める目を養成することがますます必要となってこよう。

参考文献

- Arlotto, A. (1972) *Introduction to historical linguistics*. Boston : Houghton Mifflin.
- Hagen, A.M. (1991) “Waar is de regenboog gebleven?” In : H.Crompvoets & A.Dams, *Kroesels op de boezem : het dialectenboek*. Waalre : Stichting Nederlandse Dialecten, pp.9-17.
- Jeffers, R.J. -- Lehiste, I. (1982) *Principles and methods for historical linguistics*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Keys, R.L. (1992) “Assimilation in Germanic ” In : I.Rauch, G.F.Carr & R.L.Keys, *On Germanic - Issues and Methods*. Berlin & New York : Mouton de Gruyter. 1992, pp.147-61.
- Quak, A. (1981) *Die altmittel- und altniederfränkischen Psalmen und Glossen*. Amsterdam : Rodopi.
- Shetter, W.Z. (1988) *Introduction to Dutch*. Leiden : Martinus Nijhoff.
- Sievers, E. (1878) *Heliand*. Halle : Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses.
- Vennemann, Th. -- Murray, R. (1983) “Sound change and syllable structure in Germanic phonology”, *Language* 59, pp.514-28.